

平成 21 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520128  
 研究課題名（和文） 戦前期の『校友会雑誌』にみる文芸活動と学校文化に関する調査と総合的研究  
 研究課題名（英文） Investigation and the overall research concerning art and literature activity and school culture seen 'Alumni magazine' at period of prewar days  
 研究代表者 齊藤 利彦 (SAITO TOSHIHIKO)  
 学習院大学・文学部・教授  
 研究者番号：20178495

## 研究成果の概要：

全国の旧制中学校（新制高校）に、『校友会雑誌』の所蔵状況等に関するアンケート調査を行い、323 校から回答を得た。そのデータを、1. 戦前期における『校友会雑誌』の刊行の有無、2. 『校友会雑誌』の名称とその変遷、3. 創刊の年度、4. 現在の所蔵の有無と、その号数、5. 他の所蔵場所の有無に分類し、それらのデータを対象に、誌面の構成、各欄および各項目の名称とその変化、c. 編集方針と、文芸等の原稿を採用・掲載する条件、d. 執筆・寄稿者とその推移という視点から分析した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：校友会雑誌、文芸活動、学校文化、旧制中学校

## 1. 研究開始当初の背景

『校友会誌』を資料とした文芸活動に関する研究は、旧制高等学校を対象として活発に行われてきた。例えば、旧制第一高等学校の『校友会雑誌』の復刻作業である。復刻の理由は、それが日本近代文学館によりなされたことからもうかがえるように、「わが国を代表す

る文学者たちの業績の出発点ともいえるべき作品がじつに数多く掲載され、彼らの文学を解明する鍵を提供しているものであり、しかも、これらの大部分は埋もれたままになっていたのである」というものであった。

実際に、『校友会雑誌』上において、上田敏、尾崎放哉、久米正雄、谷崎潤一郎、堀辰

雄、高見順、立原道造等の作品や、川端康成の「伊豆の踊子」の原型とされる「千代」をはじめ、多くの文学者の若き日の作品が見出されている。その他、2004年に旧制弘前高等学校の『校友会雑誌』上で、在学中の太宰治の投稿作品（「比賀志英郎」のペンネーム）が発見されたのも、同様の動きを背景としたものである。

ところで、以上のような研究の動向に比べ、旧制中学校の『校友会誌』にみる文芸活動に関する研究は、ほぼ皆無に近いといってよい状況にある。しかしながら、明治20年代から30年代にかけて旧制中学校で創刊され始めた『校友会誌』は、そのほとんどが多様な文芸欄をもっていた。例えば、明治24年創刊の東京府尋常中学校『学友会雑誌』は、「論説」「學術」「雑録」「文苑」「雑報」「附録」の各欄からなり、このうち「文苑」の欄が、生徒たちの小説、詩、短歌、俳句、翻訳等の習作が発表される場であった。また、明治33年創刊の岩手県立盛岡中学校『校友会雑誌』は、「論説」「雑録」「詞藻」「雑報」の各欄からなり、このうち「詞藻」の欄が最も多くの頁数を占め、小説、紀行文、詩、短歌、俳句等の、生徒たちの習作で埋められていたのである。

## 2. 研究の目的

全国の旧制中学校（新制高校）に、『校友会雑誌』の所蔵状況等に関するアンケート調査を行い、それら『校友会誌』の「文苑」や「詩藻」あるいは「創作」「小説」「短歌」等の欄を分析し、それらがどのように生徒の自発的な文芸活動の集約の場としての役割や、作品公開の場ともなっていたのかを明らかにしようとした。

さらには、中学校の『校友会誌』での文芸活動が、学校外での社会における商業雑誌『中学文壇』『文庫』『明星』『ホトトギス』の文芸活動へと展開していった例も多く見られる。例えば、延岡中学校の『校友会誌』に投稿し、同時期に『中学文壇』にも投稿していた若山牧水や、前橋中学校の『校友会誌』への投稿と並行して『文庫』『明星』にも作品を発表した萩原朔太郎の場合が、そうである。まさに、中学校で文芸活動に魅せられた者が、それを起点としてさらに社会的な展開をとげた例といえるだろう。

こうした点からも、本研究は中学校における『校友会誌』に見る文芸活動のはたした役割を検討し、それらがわが国近代文学史においてどのような重要な位置を持っているのかを明らかにしようとした。

## 3. 研究の方法

各地の『校友会雑誌』の所蔵状況等に関する、以下の内容のアンケート調査を行った。

- (1) 戦前期における『校友会雑誌』の刊行の有無
- (2) 刊行していた場合の『校友会雑誌』の名称とその変遷
- (3) 創刊の年度
- (4) 現在の所蔵の有無と、その号数
- (5) 他の所蔵場所の有無

さらに、そこから得たデータを検討し、次の項目に沿って比較分析を進める。

- (1) どのような誌面の構成が行なわれていたのか、
- (2) 各欄および各項目の名称とその変化
- (3) 編集方針と、文芸等の原稿を採用・掲載する条件
- (4) 執筆・寄稿者とその推移

## 4. 研究成果

当初の研究計画に即して、全国の旧制中学校（新制高校）に、『校友会雑誌』の所蔵状況等に関するアンケート調査を行い、回答を回収した。

対象としたのは、戦前期に設立された旧制中学校のうち700校であり、回答を得たのは323校である。回収率は、46.1%となった。これは、この分野の研究の嚆矢となる成果である。

以下に、それらの研究成果の概略を示してみよう。

### (1) 校友会雑誌の創刊年

戦前期に校友会雑誌を刊行していたとの回答を得た校数は216校、刊行なしと回答した校数86校、不明とした校数17校であった。刊行ありと回答した中学校名および現在の校名、そして中学校の創立年、および校友会雑誌の創刊年と所蔵状況を合わせて表に示した。（下記論文の表1参照）

さらに、その内訳として、すべて所蔵している学校は 216 校中 39 校であり、全体の二割弱という結果が見られた。一部所蔵の学校を含めれば 186 校であり、全体の八割強の学校が自校の校友会雑誌を何らかの程度で所蔵していることが判明した。

また、「一部所蔵」の内訳を大まかに三分類し、その具体的な所蔵巻数・号の回答データも作成した。

### (2) 創刊の時期とその意味

次に、校友会雑誌の創刊された年を、年代別に分類すれば以下のようなものになる。

#### 創刊年別

明治 10 年代	1
明治 20 年代	21
明治 30 年代	74
明治 40 年代	11
大正	36
昭和元年代	26
昭和 10 年代	5
創刊年不明	42

### (3) 年間の発行回数とその増減

次に、校友会雑誌の年間の発行回数を検討してみよう。投稿の量や本数が多くなければ、発行回数が増えることはない。しかし発行回数が多ければ、それだけ編集に要する労力も必要となってくる。したがってこの回数は、校友会雑誌に対して、生徒たちや学校側がかかるエネルギーや意志・情熱を具体的にあらわす指標ともいえるものであろう。

この発行回数を確認できた中学校は限定される。また先のアンケートに加え、一部は大学図書館、県立図書館に所蔵されている校友会雑誌からもデータを作成した。一時期でも発行頻度が明らかなものをデータとして収録した。一部発行年次の不明なものについても、前後の発行状況と巻数から発行回数を推測したものもある。まずは明治 20 年代の

動向は、年 3 回、5 回発行といった校友会雑誌も見られ、さらにはそれ以上の年 10 回の場合もあり、発行にかかる意気込みと期待が伝わってこよう。

それでは、明治 30 年代以降の時期にはどうなっていくのだろうか。それを年代別に分けて示したのが以下の表である。

	明治30年代	明治40年～大正5年	大正6年～大正15年	昭和
2年に1回 <sup>*i</sup>	0%	1%	2%	1%
年1回	45%	60%	75%	83%
年2回	38%	33%	18%	11%
年3回以上	18%	5%	5%	5%
データ件数	56	73	83	105

大まかにとらえるならば、明治 20 年代は年 3 回以上が多く、その後、明治 30 年代は年 2 回や年 1 回が主流となり、年 3 回発行の学校も見られる。

明治末から大正にかけては、年 3 回以上発行する学校は一部となり、大正期にかけて、年 2 回発行する学校も減り、年 1 回の発行が主流となる。少ないところでは、2 年に 1 回といった発行ペースも見られた（ただし一時期のみ）。例えば、土浦中学校では大正 6 年から大正 15 年の間（それまでは年 1 回、それ以後は年 2 回）、聖学院中学校では明治 43 年から大正 12 年の間（それ以後は年 1 回）がそうである。

### (4) 誌面の構成の傾向

校友会雑誌の内容は多岐にわたり、分析は難しいが、大まかな内容を示すものとして、校

友会雑誌に設けられた「欄」について、創刊号の比較を行なった。その結果、「論説」の欄、「散文」の欄、「韻文」の欄、「雑録」、「雑報」あるいは「校報」、「会報」あるいは「部報」はほとんどの校友会雑誌に見られた。「散文」と「韻文」は一つの欄に、学校に関する記事と校友会に関する記事は、一つの欄にまとめられることもある。

#### (5)各欄の内容

「論説」の欄は、岐阜中学校『華陽』を例にとると、明治期には、「海国思想を養成する論」(第7号、明治30年)といった国家論、「時に及んで応に勉励すべし」(第8号、明治30年)といった教訓的なもの、「文壇の青年諸君に告ぐ」(第1号、明治29年)といった青年論、「進化の理より道徳的行為の動機一元(本能)及び対象帰一(自愛)を論ず」(第37号、明治37年)といった思想的なもの、「テニソンを論ず」(第22号、明治33年)といった文学論、「源義経を論ず」(第20号、明治32年)といった偉人論など、多岐に涉っている。

大正および昭和期は「無線の威力と実用化」(第77号、大正13年)といった科学技術に関するものや、「現時の社会問題と真宗」(第74号、大正12年)といった社会問題を扱ったものも掲載されるようになる。

「散文」の欄は、「文苑」といった名称が多く、内容は、作文(明治期には、「忍耐説」といた教訓的なもの、「観楓記」のような叙事文も見られる)、手紙文、写生文、身辺記、紀行文、随筆、小説などがある。

「分苑」中の作品の長さについては、愛知第一中学校『学林』では、第91号(大正7年)「芸苑」が26ページで16編。102号(昭和2年)「文苑」が、63ページで44編と、1ページ程度の小品文ばかりのところもある。一方で、会津中学校『学而会雑誌』第16号

(大正3年)のように、6ページ程度の小説など長い作品が掲載されるところもある。作品の長さは、文芸的内容にどれだけの紙幅を割くか、より多くの生徒の作品を掲載しようとするかといった編集方針にもよる。

また、「文苑」といっても内容は様々で、『湘南』第16号(昭和13年)は、時代背景の影響があるとはいえ、「制空権の把握」の題で5編の作品が掲載されているように、文芸の志向が強いとはいえない例も見られる。

「韻文」の欄は、「詞藻」といった名称が多く、「和歌」、「俳句」など別々の欄を設ける雑誌もある。内容は、短歌、俳句、新体詩で、明治期には漢詩も多く、昭和期には、学校によっては、童謡や民謡、川柳が掲載されるところもあった。

他の欄に入れにくい雑文などの欄は「雑録」、「雑俎」あるいは「漫筆」と呼ばれることが多かった(以下、総称して「雑録」とする)。「雑録」は多様な生徒の多様な関心を反映していた。生徒の実体験に基づいた話、学校に関する話、他の生徒への呼びかけ、遊びの要素のつよい文などが見られる。学校生活に関する話はここで語られることが多い。

「論説」に掲載されてもおかしくない本格的な文が掲載されたり、「通信」欄がない場合、この欄に卒業生が進学先の様子を伝える文が載ったりすることもあった。

#### (6)雑誌編集の組織

雑誌の編集は、「雑誌部」、「会誌部」、「文芸部」といった「部」が行うことが多かったが、校友会の「部」は、例えば、「総務部」、「会計部」、「図書部」といったように現在の生徒会の委員会的なものも含んでいた。「雑誌部」は、文芸活動といった部活動の面と、校友会の広報活動といった委員会活動の面をあわせ持っていた。

委員会の性格が強い雑誌編集の組織には、

以下の例が見られる。

岐阜中学校の校友会「華陽会」では、「雑誌部」の「編輯員」が雑誌の編集を行っていたが、「編輯員」を全校の選挙（明治29年～明治32年）、評議員（各組より2名選出される）による選挙（明治33年～38年）で選出するなど、「編輯員」は全校的な委員としての位置づけであった。

#### (7) 予算

校友会の予算についてもまた、他の部に比べ校友会における雑誌部の地位の大きさを示している。明治期には雑誌発行の経費は、校友会全体の中で大きな割合をしめていた。岐阜中学校の場合、明治34年度下半期では、支出総額432円90銭のうち、145円が雑誌部の経費となっている。明治35年度上半期では、支出総額270円98銭5厘のうち、74円97銭が雑誌部の経費となっている。これらの場合、全支出の3割程度が雑誌部に割り当てられていた。

#### (8) 編集作業

編集については、編集に携わる生徒の委員が、岐阜中学校華陽会のように生徒間の選挙で選ばれる場合もあり、千葉中学校のように教員の指名による場合もあった。

編集作業についても、生徒主導で行なわれるか、教員主導で行なわれるかといった違いがある。明治期の事例をみると、会津中学校では、「投稿は理事（生徒一引用者）の選択を経、更に監督先生の認可を経べきものとす」というように、生徒が原稿の選択を行っていた。だが、監督である教員の校閲の結果、「内容の如何で没書抹殺の難に逢つたのが重なるものは無慮左の七編である。」というように、掲載できなくなった原稿もあった。

以上に加えて、分析の内容として、「校友会雑誌への参加 投稿を中心に」を検討した。校友会雑誌の投稿者は、校友会の会員の生徒、

教員、卒業生（大正昭和期になると、卒業生の投稿は少なくなる）である。

明治30年代の岐阜中学校『華陽』の投稿者を分析すれば、校友会雑誌に関心を持ち投稿する代表的な生徒たちの例として、文芸的な関心の強い生徒たちがあった。例えば、「実に昨今の華陽投稿者は、暁星の如く罕に、たゞ二三の文学的嗜好を具備せる輩の、これに熱心にするあるのみ」や、「賛助会員佐々木紫光君『華陽文士に告ぐ』なる警告的文を寄す。読むものは所謂文士のみ」といった論が掲載されたりした。

さらには、校友会雑誌の機能として、①文芸的機能、②学術的機能、③教育的機能、④機関誌的機能があったことを解明した。

この文芸的機能に関して、例えば昭和期において、文芸的機能をどこまで重視するかは様々な意見があり、学校によって正反対の意見が出されることもあった。「文芸部はそれ自体に於て、文芸活動の半面を持ってゐる。これが文芸的作品が、過重の譏をうけながらも、雑誌の大半を占めてゐる所以である。」

（小田原中学校）のように、文芸重視に対する批判もあった。反対に、「会誌をして単に校友会の報告にのみならしめぬ杯といふ皆さんのご希望であったので、校友会の報告は多少削って、作文、詩歌等を主としました」（厚木中学校）というように文芸的機能を重視する論も見られる。

この点については、各学校で様々な対応がとられていたようだが、ここでは、文芸的機能に特化させ校友会誌を文芸部の雑誌へと転換した本牧中学校の例を取り上げる。

本牧中学校『牧浜』は、昭和3年、学校全体の生徒の発表の場、各部活動の報告といった校友会誌から、文芸部の雑誌へとその性格を変更させた。

以下、昭和7年に掲載された文芸部の生徒

の論説「牧浜回顧」によって、そのいきさつを追っていく。創刊号は、「弁論的な作品と地理的或は歴史的作品によつて殆どその大半は埋められてゐた。文芸作品としては戯曲「鐘の響」が僅かにその一隅にあらはれてゐたが、それも教訓的なものに陥つてしまつて文芸的価値を認め得るものではなからう。」、第二号についても、「今迄の弁論的な作品が影をひそめたものゝ、これに発表されてゐる作品は作文的なものゝみで文芸価値のあるものは見受けられなかつた。」として、この頃の『牧浜』は、「中等学校のそれと同様に作品の発表と各部の報告を兼た所謂校友会雑誌として平凡に終つてゐる。」という状況だった。

それが、昭和3年、「新任の吉本先生が文芸部長となるや、突然牧浜の独立運動が決行された。この運動に対して当時教頭であつた及川校長の多大な賛同を得て、終に牧浜は文芸部のみの純文芸誌として更生するに至つた。」と論じている。

及川校長は、「文芸部の従来雑誌は何んだか訳の分らぬ雑誌で何を目的に、何んな方針でやつてゐるのか分からない。修身倫理の訓話めいたものがあるかと思ふと、地理、博物の研究報告書もある。各部の部報もある。何処に文芸らしい所があるか。文芸部の使命は、この校内に於ける文芸思潮の指導の任に当ることが第一義の使命であるから、その使命の為に全力を挙げて進むべきである」と主張したと論じている。

実際に第二号の編輯後記を見ると、「学校日誌や校友通信、校友名簿などを急に掲載する事になりて、名簿の整理上、大変な手数と時間とを必要した」ということがあり、「吾々文芸部のものが一週間もの徹夜をした」というように、文芸以外のことで文芸部が振り回されていたことがうかがえる。

『牧浜』第6号の内容は、「文学日本と通俗文学是否論」、詩、小品、俳句会吟詠、短歌、牧浜雑詠、短歌会詠草、「中津川吟行」、「牧浜回顧」、民謡小曲、創作というように、文芸以外の内容は掲載されていない。

一方で、文芸部長（教員）は、文芸的傾向の行き過ぎを懸念していた。

この本牧中学校『牧浜』の例は、校友会雑誌の機関誌的機能を切り捨て、文芸的機能に特化した例といえる。

以上、研究成果の概略の一端を示したが、詳細な内容は、研究代表者と分担者の共同執筆論文として、「旧制中学校における校友会雑誌の研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要 第48巻』2009年3月に発表した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

### ① 齊藤利彦、市山雅美

「旧制中学校における校友会雑誌の研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要 第48巻』2009年3月、21頁～47頁、査読有

### ② 市山雅美

「旧制中学校における自治の概念と諸類型：大正期の中学校における規律維持の組織と活動から」『湘南工科大学紀要』40(1) 2006年3月、87頁～94頁、査読有

〔学会発表〕（計1件）

### ① 市山雅美

「旧制中学校における校友会誌の編集における生徒の自主性」  
日本教育学会 第66回大会  
平成19年8月29日 慶應大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齊藤利彦 (SAITO TOSHIHIKO)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：20178495

### (2) 研究分担者

市山雅美 (ICHIYAMA MASAMI)

湘南工科大学・工学部・専任講師

研究者番号：50410030